

# “放置国家”で広がる漁業被害！

かつての「宝の海」の象徴・タイラギも  
2年連続の休漁に追い込まれる！

国は、昨年12月20日、諫早干拓潮受堤防の開門を命じた福岡高裁確定判決の履行期限を徒過した。その後も、判決履行の具体的な道筋すら一向に示そうとせず、「話し合いを呼び掛けている。」などとするのみで、積極的な動きは何もしていない。憲法で定められた司法判断を蔑にし、問題解決の姿勢を示そうとしない国の態度に、古川佐賀県知事は「法治国家でなく、放置国家」とブログで述べた。

この「放置」の間にも、有明海の漁業者らには甚大な漁業被害が生じている。

【佐賀新聞2013年12月9日】  
タイラギ2年連続休漁 漁場再生兆し  
見えず

2年連続の休漁が5日決まった有明海の二枚貝「タイラギ」。佐賀、福岡両県が133地点を調査したところ、漁獲できる成貝(殻長1.5センチ以上)は3地点でわずか4個しか確認されなかった。漁ができる水準には程遠く、漁場再生を願う漁業者の苦悩は続いている。

「これは壊滅というレベルですよ」。5日開かれた佐賀、福岡の潜水漁業者の協議会。事務局担当者は顔をゆがめ

た。タイラギの稚貝は2年間で漁獲できるサイズに成長するが、昨年の九州北部豪雨と貧酸素水塊発生で稚貝が少なかったことが響いたとみられる。

さらに来年に向けても見通しは厳しい。稚貝が見つかったのは133地点のうち27地点だけで、100平方メートル当たり2〜29個。漁ができる目安となる1000個以上をはるかに下回り、椛島徳義会長は「これでは海に出ても採算は合わない」と厳しい表情を浮かべた。

稚貝が今季育たなかった原因について、県有明水産振興センターは「4月以降のナルトビエイの食害と、8月末〜9月初旬の大雨による低塩分化で斃死したようだ」と分析。一方、漁業者は国営諫早湾干拓事業の潮受け堤防排水門の閉め切りの影響が大きいとみている。

県内のタイラギ漁獲量(貝柱重量)は、1990年の410トンを超えてピークに激減。堤防閉め切りの97年は97トン、98年14トン、99年ゼロとなった。2009年は112トンまで持ち直したが、今季を含めて計7年が「漁獲ゼロ」という厳しい状況が続く。太良町のタイラギ漁業者、大鋸幸弘さん(57)は「筑後大堰の完成(85年)で生育に不可欠な砂が流れにくくなり、

堤防閉め切りがとどめをさした」。潮流が遅くなってヘドロや潟が増え、二枚貝が生息できなくなったことを肌で感じている。

現に、潮流の早さから砂地が多い大牟田沖は主力漁場として知られていたが、90年以降は稚貝が激減した。01年には漁獲に至る前に死んでしまう「立ち枯れ斃死(へいし)」もみられるようになった。持ち直した09年ですら再生の兆しはみえず、漁獲量が上がったのは太良沖に限られた。それだけに、漁業者は、堤防閉め切りと諫早湾の漁業被害の因果関係を調べる開門調査に期待を寄せてきた。福岡高裁判決が命じた開門期限が12月20日に迫っており、大鋸さんは「国は法を破ることなく、責任を持って実行してもらいたい」。宝の海再生に向けた一歩が踏み出されず、いら立ちも感じている。

## 冬季も赤潮発生でノリが色落ち！

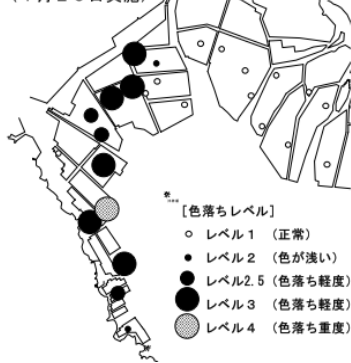
【NHK佐賀支局・2014年1月23日】

### 赤潮でのり対策を呼びかけ

白石町沖の有明海では、「スケレトネマ」という植物プランクトンが原因となった赤潮の発生が確認されている。県は、今後、有明海で養殖されているノリに色落ちの被害が広がるなど対策を呼びかけています。

佐賀県有明水産振興センターによりまずと、赤潮の発生が確認され

色落ち状況調査結果  
(1月20日実施)



たのは、白石町沖の有明海で、今月16日の調査で、海面付近の水が赤く濁っているのが確認されたということです。センターが分析した結果、赤潮の原因となっているのは「スケレトネマ」という植物プランクトンで、有明海でこの時期に赤潮の発生が確認されたのは、7年連続のことです。さらに、今月20日には、この赤潮が原因と見られるノリの色落ちの被害も白石町や太良町の沖合で確認されており、ノリの生育に必要な栄養塩の減少も見られるという事です。原因となっている「スケレトネマ」は、海水温が低くなると大きく成長する特徴があり、今後、さらに増えるおそれがあることから、センターではノリの色落ちの被害が広がる可能性もあるとして早めに収穫するなど漁業者に対策をとるよう呼びかけています。